

International Art Festival

BIWAKO
BIENNALE
2022 ORIGIN
in Omihachiman & Hikone

起 源 ORIGIN

開催10回目となる2022年のテーマは、“起源～ORIGIN”。今もスピードを上げがりつつある宇宙、そして我々の起源も、138億年前に起こったビッグバンに集約されます。何億何兆という星や宇宙が生まれまた消えていく。誕生と死は、宇宙でさえ避けることのできない運命です。一人一人の人生も、その縮図なのかもしれません。

何故、宇宙は生まれたのか？我々人類の存在に、意味はあるのか？創造し探求し続ける人間の最も深いところから生まれ出る「アート」の中にこそ、その答えの片鱗を見出すことができるのではないのでしょうか。

The theme for the 10th edition of the BIWAKO BIENNALE is ORIGIN. Our origins, and the universe, which is expanding at an ever-increasing speed, can be traced back to the Big Bang that occurred 13.8 billion years ago. Trillions and trillions of stars were born and disappeared again. Birth and death are unavoidable, even for the universe itself. Each individual's life is nothing but a miniature reproduction of this.

Why was the universe born? Is there any meaning to our existence as human beings? I believe we can find a glimpse of the answer in the "art" that emerges from the deepest part of the hearts and minds of human beings who continue to create and explore.

| 開催会期 | 2022年10月8日(土) ～ 11月27日(日)

| 会場エリア | 滋賀県 近江八幡旧市街地、沖島、彦根市街地、彦根城、鳥居本

| 主催 | 国際芸術祭BIWAKOビエンナーレ実行委員会、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁

| 実行委員長 | 小西 理(近江八幡市長)

| 総合ディレクター | 中田 洋子



BIWAKOビエンナーレ 2022 起源

ごあいさつ

1冊の写真集がある。「Before They Pass Away」。そこに写された彼らの顔や身体は自然の染料、顔料に彩り豊かに塗られて誇らしげである。また帽子や衣装は鳥の羽や宝石、意味ありげな文様で飾られてこの世ならぬ世界に語りかけているようでもある。馬を駆りあるいは大地を踏みならし、猛禽を友とし狩りをする。

ORIGIN — 我々はどこから来て、どこへ行くのか。この古来から繰り返されてきた問いからは、現代に生きる私たちの日常はほとんど切り離されている。散策する街角でのふとした瞬間、空を眺め刻々と色を変えていく夕焼けの雲に心を奪われるとき、昼下がりの陽光に輝く湖面からの反射が瞳の奥に射し込むとき、そんな問いは仕舞い込まれた子ども時代のおもちゃ箱の中の人形のように、久しぶりだねといった面持ちで心に浮かんでくるかもしれない。

今回で10回目を迎える、BIWAKOビエンナーレ 2022。テーマは「起源～ORIGIN」。時代の中で忘れ去られようとしている建築物、また蘇ろうとしている構造物の中で出会うさまざまな作品群はきっと私たちをこのような問いにいざなう巧みに仕組まれた罫に違いない。心して触れよう、心して眺めよう、この永遠の迷宮に捉えられないように。それともそれは新しい時代の夜明けを予感させるものになるのだろうか。

参加された国内外の作家の方々、開催にあたって協力いただいたの方々、心を寄せていただいたすべての方への感謝とともに、はるかな、はるかな昔、世界が、宇宙がともに生き平和であった頃をあらゆる存在が思い出せるように、祈りをこめて。

実行委員長
近江八幡市長 小西 理

BIWAKO BIENNALE 2022 ORIGIN

Greetings

There is a photo-book titled “BEFORE THEY PASS AWAY.” People in the book look proud of themselves with their faces and bodies colorfully painted with natural dyestuffs and pigments. With their headgear and garments decorated with birds' feathers, jewels and symbolic patterns, they also look as if they were communicating with another world. They ride horses, stamp their feet on the earth, and hunt with falconry birds.

ORIGIN — Where did we come from, and where are we going? Our everyday life today seems to be almost disconnected from this repeatedly asked classic question, which however, may pop up like a doll found unexpectedly in a toy box of your childhood long tucked away in your home. Such a moment may come when you are strolling the streets, when you are mesmerized by sunset clouds with changing colors, or when a ray of early-afternoon sunlight reflected from the surface of the lake reaches your eyes.

The theme of the 10th edition of the BIWAKO BIENNALE 2022 is ORIGIN. The works of art on show in such buildings that have slowly been abandoned with the passage of time and that are being given a new lease of life are ingenious devices that will guide us to that ancient question. Be careful not to lose yourself in this eternal labyrinth when you touch or behold those artworks. They may mark the dawning of a new era.

I am grateful to the participating artists from Japan and abroad and everyone who supported the festival, and hope the festival will remind every one of us of the peaceful world which was once integral with the universe in times long past.

Chairman
Mayor of Omihachiman City Osamu Konishi

序文

まだ汗ばむほどの暑さの残る10月初頭から赤や黄色に色づいた木々がその葉を落とし、冬へと向かおうとする11月末まで、移り行く秋の清々しい季節とともにあった10回目のBIWAKOビエンナーレも、無事幕を閉じました。

毎回なんとか会期中に図録を発行していたのですが、今回は、会場が増えたせいもあり、会期後の編集となりました。未だ余韻冷めやらぬ中、写真の中で見る作品たちに改めて深い感動を味わいつつ…。

作品たちが去り、元の寂しい佇まいとなった建物たちを見るにつけBIWAKOビエンナーレが創り出す美しい風景は、なものにも代え難い稀有な存在なのだと実感させられます。

それはその建物たちが有する歴史、そこで営まれた生活の記憶と作品の息遣いがびたりと合ってこそその賜物、建物が作品たちを受け入れ喜びの声をあげているからに他ならないでしょう。

会場として使用させていただいている建物は、江戸、明治、また大正、昭和時代に土地の風土を鑑みて建てられたものです。丹精込めて造られたその造作は、まさに芸術作品、そうした過去の建物の魅力と現代のアーティストが生み出す作品とのコラボレーションは、BIWAKOビエンナーレの最大の見どころとなっています。

大津で育った私が、2002年に初めて訪れ、このような美しい町が滋賀にはあるのだということに驚くとともにどうしてもこの町でBIWAKOビエンナーレを花開かせてみたいと強く思ったのが、2回目から開催している近江八幡でした。以後、ここを拠点に回を重ね、今回が大津での開催を含め10回目…。最初に訪れた当時のひっそりと時が止まったような町の印象を思うと今の活気あふれる町は、夢のようでもあり本当に感慨深い。

近江八幡での開催が叶ったのは2004年ですが、2002年に

出会い、2016年まで拠点として私たちと共にあった“天籟宮”での思い出は特に心に深く刻まれています。当時長く住み手を失っていたせいで荒れた状態だったところをお借りし、アーティストのレジデンスとして活用を開始。汲み取り式トイレを水洗トイレにし、キッチンもつけ、BIWAKOビエンナーレの準備をしつつ土日限定でカフェを営んだ時期もありました。堀に面した離れでお茶をされた経験のある方もおられるのではないのでしょうか？ 何人ものアーティストさんがここで暮らし、作品を1年がかりで制作していたのも今は懐かしい思い出です。BIWAKOビエンナーレのない年は、毎月マルシェをしたり、お茶会やコンサート、小さな展覧会も開催しましたね。何度もBIWAKOビエンナーレの会場にもなった“天籟宮”ですが、今は、このあたり随一の高級宿泊施設となっています。

BIWAKOビエンナーレにまつわる思い出は本当に濃すぎてここには書き尽くせませんが、毎回、秋の開催は季節の移り変わりを反映し、短くなる日と反比例して長く伸びていく太陽光との饗宴は変わることなくBIWAKOビエンナーレの醍醐味の一つといえます。今回も明かり取り窓から真っ直ぐに伸びる光は、水をたたえたガラス作品へと伸び、想像を遥かに超える得も言えぬ美しい虹の情景を作り出してくれました。その建物のみならず、至る所から触手を伸ばす光が作品たちと戯れる様は、まさにお陽さまからの贈り物、ミラクルタイムに居合わせる喜びは、何ものにも変え難い至福。そして搬入時には、雑草に覆われジャングル状態である庭も会期が進むとともに段々と表情を変えていき、四季のある日本という国に生まれたことをありがたく思うと同時に、この四季の移り変わりが日本人の美意識を育んだのだな、と実感させてくれます。

今回、初めて会場となった沖島は、日本の自然の豊かさを味わうには、これ以上望めないほど素晴らしいところ、日本の淡水湖の中に浮かぶ唯一の有人島です。島民は約250人、漁業を生業とする島で、1台も車はありません。島に渡るともう異次元世界。なんともんびり、そしてゆったりとした時が流れ

ています。そこでのアート作品も島自体、また島を取り囲む琵琶湖や山々の風景こそが主役といった島に寄り添ったやさしい作品たちでした。

前回から加わった彦根でも国宝、彦根城や玄宮園はじめ、商店街の空き店舗や元銭湯など魅力あふれる建物や庭が、アートで一層魅力を増し、町散策を楽しんでいただけたかと思います。

また旧中山道の宿場町鳥居本は、私自身前年の2021年に初めて訪れたところで江戸時代から続く薬屋さんがいまだ現役で同じ薬を売っておられることにまず驚愕しました。そして築270年というその建物の立派さは、他にたとえようもなく、明治天皇が小休止をされたという文化財にもなっているところを会場とさせていただくこととなったときには、どのような作品がここの魅力をひきたててくれるだろう？とワクワクしながら妄想を膨らませていました。また旧街道沿いに残る元合羽やさんのお宅も落ち着いた佇まい、お薬やさんも元合羽やさんもお住まいになっていますので、手入れが行き届き、空き家である会場とは違って温かみがあります。また近江鉄道の駅舎も100年ほど経っている有形文化財、ここも会場にさせていただき、とても濃い内容の展示になったかと思います。

そして近江八幡、沖島、彦根、鳥居本、それぞれの土地に住む方々が協力してくださり、各会場の受付を担当くださったこと本当に感謝申し上げます。そうした方々の助けなしには、到底BIWAKOビエンナーレを開催することは叶いません。来られるお客様にご自身の土地の歴史をご説明いただいたり、昔の町の様子を語っていただいたり、ホスピタリティーあふれる方々の存在はBIWAKOビエンナーレをさらに魅力あるものにしてくれる柱と言っても過言ではありません。

こうしたありとあらゆる背景があって はじめて“BIWAKOビエンナーレ”という壮大なひとつのドラマは完成していくのだと毎回その奇跡に感動せずにはおれません。

“起源”と銘打った今回のテーマは、BIWAKOビエンナーレの起源を思い起こすことでもありましたが、それはひいては私自身の人生を思いかえすことでもありました。決して早いスタートではなく、人生の中盤から始めたBIWAKOビエンナーレですが、それ以前の人生もそれ以後の人生もBIWAKOビエンナーレが中心となって歩んできたように思います。

人生の終盤に入った今、これからどれほどの回を重ねることができなのか、全くわかりませんが、また次回を楽しみにしている、という多くの方々からの声は、励みにもなりとても嬉しいです。BIWAKOビエンナーレは毎回、ある意味自身への挑戦でもありました。さらに素晴らしい次元へと到達したいという抑えがたい欲求が湧き上がって来れば、多分、次回があるのだらうと思います。

湧き上がる創造意欲は、アーティストとして欠かせないもの、どこからくるのかわからないその存在こそが、人間の最も素晴らしい資質であり、争いや殺戮という悪しき資質の対極にあり人類が美しい地球に生かしていただいてもいい存在理由だという私の信念はこれからも変わることはないでしょう。

地球の宇宙の起源からすれば、人類の起源は、さほど遠い昔というわけではありません。そしてさらに短い人の一生、この世に生を受けたその瞬間を起源とし、その命の尽きるまで、どのように生きるのか、BIWAKOビエンナーレとの出会いが、皆さまにとって、これからの人生の新たな“起源”となり、より豊かなときを過ごす糧となるならBIWAKOビエンナーレ自体の存在も意義深いものとなり一層輝きを増すことでしょう。

末尾となりましたが、今回、そしてこれまでにBIWAKOビエンナーレを愛し、支えてくださったすべての方々 に心よりお礼申し上げます。

総合ディレクター

中田 洋子

Preface

Held in the period of changing seasons from early October, with some days still warm enough to make us sweat, through late November, with trees dropping their gold autumn leaves heralding the approach of winter, the BIWAKO BIENNALE has just wrapped up its successful 10th edition.

At the previous editions, we managed to publish catalogs during each event. For this time, however, catalogs were compiled after the festival partly because we had more venues than ever. Still feeling excited after the festival, I was once again deeply touched by the artworks in pictures.

After the artworks were removed, the venue buildings look deserted again, showing that the beautiful scenes created there would not have been possible without the BIWAKO BIENNALE. The most important key to that is that the works of art perfectly resonate with the history of the buildings and memories of life spent there. This makes the buildings embrace the works and glow in pleasure.

The venue buildings were built to meet the natural and cultural features of the place in the Edo, Meiji, Taisho, or Showa era. Built with painstaking work, the buildings themselves are artistic works. The combination of such old houses and modern artworks is the greatest appeal of the BIWAKO BIENNALE.

I grew up in Otsu City, Shiga Prefecture and never knew that the prefecture had such a beautiful town until I first visited Omihachiman in 2002. I instantly developed a strong desire to bring off the BIWAKO BIENNALE in this town. Having used venues in Omihachiman since the second edition, after the first one held in Otsu, we had the 10th edition this year. Recalling that Omihachiman was so quiet that it seemed as if time had stood still at that time when I first visited there, I feel deeply moved by how vibrant the town has become. This feels like a dream.

Before the festival started having venues in Omihachiman in 2004, I found Tenraikyu in 2002, the building which had

served as our operations base until 2016. I will never forget memories at Tenraikyu, which had been long abandoned and dilapidated. I rented the house and began using it as a residence for artists. I had the house, which originally had a septic-tank-style toilet, furnished with a flush toilet and a kitchen. For a certain period of time, we ran a café at Tenraikyu on Saturdays and Sundays while preparing for the festival. You might have had tea at the café in the house' s detached room facing the canal. I fondly remember many artists living there for a whole year to create their works. In years without the BIWAKO BIENNALE, we held a once-a-month market, tea ceremonies, concerts and small exhibitions at Tenraikyu. After being used as one of our regular venues for the BIWAKO BIENNALE, the residence is now a prominent high-end accommodation in the town.

I hold too many precious memories of the BIWAKO BIENNALE to share here. One of many great things about the festival is the spectacle created by art in combination with autumn sunlight, which casts longer shadows as the days get shorter showing the passing of the seasons. At this edition of the festival, sunlight traveling in straight-line rays from lighting windows reached a glass work containing water, creating an indescribably beautiful view with rainbows. At other venue buildings as well, we enjoyed blissful moments when rays of light came from everywhere to the artworks as if they were communicating with each other playfully. Those scenes were just a gift from the sun. The gardens of the venue buildings were overgrown with weeds like a jungle when the exhibits were being set up. They then took on different looks with each passing day during the event, making me feel grateful that I was born in a country with four seasons and realize that the turning of the seasons has contributed to a unique sense of beauty in Japan.

At this edition, we had venues on Okishima Island for the first time. Okishima is one of the best places for experiencing the natural riches of Japan, and is the only inhabited island in a freshwater lake in the country. About 250 people live there,

many of them engaged in fishing. There are no cars on the island. Once setting foot on there, you will feel transported into another dimension with a peaceful atmosphere and slow-moving time. The works of art exhibited there were in harmony with the island, lake and mountains surrounding the island, spotlighting the beautiful natural scenery.

In Hikone, a new venue area since the last edition, works of art added attractions to the charm of the venue buildings and gardens, including National Treasure Hikone Castle and its Genkyuen Garden, vacant stores in the shopping street, and a former public bath house, offering a delightful stroll for visitors.

Toriimoto is a former post town on the Nakansendo highway, to which I made my first visit in 2021. To my astonishment, there is a pharmacy established in the Edo period and some of the medicines handled there are the same as those sold back then. The 270-year-old house, which is registered as a cultural property, was used as a rest stop for Emperor Meiji. When I learned that we were allowed to use this incomparably magnificent building as a venue, I was thrilled imagining what sort of art would enhance the beauty of this house. A former raincoat shop with a calm and restrained appearance on the Edo-period highway was also a venue. Both the shop and the pharmacy are still used as residences and therefore are maintained well and have the warmth that can' t be felt in unoccupied houses. Toriimoto Station of Ohmi Railway, a 100-year-old building listed as a tangible cultural asset, was also used as a venue. Although the Toriimoto area had less venues than in other city areas, it was a treasure trove of artistic delights.

I am really indebted to the people living in Omihachiman, Okishima, Hikone, and Toriimoto who served at reception desks at the venues. Without their support, the BIWAKO BIENNALE would not have been possible. They offered generous hospitality to visitors by talking about local history or what the town was like in the past. It is not too much to say that they are key players in making the festival

even more attractive.

All such dedication behind the scenes is integral part of the BIWAKO BIENNALE as a magnificent drama. I have never ceased to be amazed by this miracle.

The theme for this edition, ORIGIN, provided an opportunity for me to revisit the origin of the BIWAKO BIENNALE and even look back on my life. I was already halfway through my life when I launched the BIWAKO BIENNALE, but I believe the festival has always been at the center of my life even before its inauguration.

Now in the last part of my life, I am not sure how many more editions I will be able to curate. But I am really encouraged and delighted by comments from many people expressing their high expectations for the next edition. Holding the BIWAKO BIENNALE has been a challenge to myself. If I feel an irresistible desire to reach an even higher level, I will probably take up yet another challenge to hold the festival.

Creative urges, which are vital to any artist, come from nowhere. They are the most wonderful nature of humanity, opposing humans' vicious thirst for fighting and killing. I have an unshakable belief that our zeal for creation is the very reason why we are allowed to live on this beautiful planet.

Compared to the origin of Earth or the universe, the origin of humankind was not very long ago. Our lifespan is even shorter. How should we live a life from the moment of origin at which we come into the world until the day we leave it? If the BIWAKO BIENNALE can bring you a new "origin" that enriches your life to come, the festival itself will have greater meaning and shine even more brightly.

Finally, I would like to thank all those people for their love and support extended to the BIWAKO BIENNALE at this as well as previous editions.

General Director
Nakata Yoko

近江八幡エリア

OMIHACHIMAN AREA

012	近江八幡旧市街地 会場 Omihachiman Old Town Venues
014	旧八幡郵便局 Former Hachiman Post Office Say Say Say, Inc. / 藤原昌樹 Fujiwara Masaki / 田中誠人 Tanaka Masato
018	まちや倶楽部 MACHIYA CLUB 国谷隆志 Kunitani Takashi / 植松琢磨 Uematsu Takuma / ガブリエラ・モラウエツ（+タリナイナニカ）Gabriela Morawetz (+ tarinainanika) 赤松音呂 Akamatsu Nelo / 小曽川瑠那 Kosogawa Runa / 佐々木颯 Sasaki Rui / 市川平 Ichikawa Taira / 米谷健 + ジュリア Ken + Julia Yonetani
028	旧扇吉もろみ倉 Former OGIKICHI Storehouse for unrefined soy saiho + 林イグネル小百合 saiho + Hayashi Egnell Sayuri
030	禰長（旧喜多七右衛門邸） KICHOU [Former Kitashichiemon Residence] アトリエシムラ atelier shimura / サークルサイド circle side / 井上剛 Inoue Tsuyoshi / 宇野裕美 Uno Hiromi / 横山翔平 Yokoyama Shohei 海野厚敬 Unno Atsutaka / 草木義博 Kusaki Yoshihiro / 江頭誠 Egashira Makoto / 給田麻那美 Kyuta Manami / 田中太賀志 Tanaka Takashi
042	寺本邸 Teramoto Residence 坂本太郎 Sakamoto Taro / 浅野暢晴 Asano Nobuharu / 秋永邦洋 Akinaga Kunihiro / パンチョ・フランソワ・キリシ Pancho François Quilici ジュリアン・シニョレ Julien Signolet / あわ屋 + Kikoh Matsuura AWAYA + Kikoh Matsuura / ロバート・ハイス Robert Hais 米津真理奈 Yonetsu Marina
052	八幡山展望館 Mt.HACHIMAN Observation Deck 君平 Kumpei / TSURUGI [ACOON HIBINO]
054	カネ吉別邸 KANEKICHI Private Residence 細井篤 Hosoi Atsushi / 田中哲也 Tanaka Tetsuya / 田辺磨由子 Tanabe Mayuko / 西島雄志 Nishijima Yuji 本郷芳哉 Hongo Yoshiya / アン・エリングスタム Ann Eringstam / 赤松音呂 + 横山翔平 Akamatsu Nelo + Yokoyama Shohei
064	藤ya FUJIYA 亘章吾 Watari Shogo
066	旧伴家住宅 Former Ban Residence エヴァ・ペトリッチ Eva Petrič / うらゆかり Ura Yukari / 岩崎萌森 Iwasaki Memori
070	幸村邸隠居 Koumura Family Retreat Residence 河合晋平 Kawai Shimpei
071	ティースペース茶楽 Tea Space SARAKU Kikoh Matsuura
072	沖島 会場 Okishima Venues
074	源弥亭 GENYATEI 廃船 Decommissioned Ship 小西葵 Konishi Aoi
075	公園 Public Park 芦澤竜一 Ashizawa Ryuichi
076	島に点在 Scattered around the island 石川雷太 Ishikawa Raita
078	栈橋 Pier 君平 Kumpei
079	沖島漁協組合作業場（2F） Okishima Fishery Cooperative Association Workshop 2F 中田ナオト Nakada Naoto

彦根エリア

HIKONE AREA

080	彦根城周辺 会場 Hikone Castle Surrounding Venues
082	元 近藤呉服店 Former Kondo Kimono Shop 君平 Kumpei / 田中真聡 Tanaka Masato / 菱田真史 Hishida Mafumi / 三田地博史 Mitachi Hiroshi マチュー・キリシ Mathieu Quilici / 大野由美子 Ono Yumiko / 小出ナオキ Koide Naoki
088	中野家具2号館 Nakano Furniture Second Store 林勇気 Hayashi Yuki / 村松英俊 Muramatsu Hidetoshi
090	伊藤邸 Ito Residence 伊藤幸久 Ito Yukihisa
092	山の湯（元銭湯）YAMA-NO-YU [Former Public Bath House] 大野宏 Ohno Hiroshi / 大野宏 + 三田地博史 Ohno Hiroshi + Mitachi Hiroshi / 池原悠太 Ikehara Yuta 沙羅双樹 Sarasaju / 江頭誠 Egashira Makoto
095	スミス記念堂 Smith Memorial Hall 宮田彩加 Miyata Sayaka
096	玄宮園 Genkyu-en 細井篤 Hosoi Atsushi
098	楽々園 Rakuraku-en Villa 野田拓真 Noda Takuma / 度會保浩 Watarai Yasuhiro
100	彦根城 天秤櫓 Hikone Castle – The Balance Turret [Tenbin Turret] 池原悠太 Ikehara Yuta / オージック AUJIK
101	彦根城 西の丸 三重櫓 Hikone Castle – Nishi-no-Maru Three-Story Turret 三木サチコ Miki Sachiko / イシャム・ベラダ Hicham Berrada
103	彦根市役所 Hikone City Hall 奥中華人 Okunaka Akihito
104	鳥居本 会場 Toriimoto Venues
106	鳥居本駅舎 Toriimoto Station 三木サチコ Miki Sachiko
107	木綿屋（元合羽店）Momen'ya [Former Raincoat Shop] 野田拓真 Noda Takuma / 度會保浩 Watarai Yasuhiro
108	有川家（明治天皇鳥居本御小休所）Arikawa Residence 塩見亮介 Shiomi Ryosuke
110	有川家住宅別邸 Arikawa Private Residence 西島雄志 Nishijima Yuji
112	プレBIWAKOビエンナーレ2022 PRE-BIWAKO BIENNALE 2022 元離宮二条城 二の丸御殿台所・御清所 Nijo-jo Castle Ninomaru-goten Palace Daidokoro and Okiyodokoro 西島雄志 Nishijima Yuji / 塩見亮介 Shiomi Ryosuke / 池原悠太 Ikehara Yuta / 給田麻那美 Kyuta Manami
116	ワークショップ・イベント Workshop & Event

※ 会場ページ及び、作品ページ内の QR コードからは、写真のみでは伝わりにくい会場や作品の様子を動画にてご覧いただけます。
Some pages are provided with QR codes. They give you access to video clips of the venues and artworks that cannot be captured by photography alone.



近江八幡市街地

Omiya Old Town

メイン舞台となるのは、水郷と古き商家の佇まいが美しい近江八幡旧市街。1585年に豊臣秀次が築城した八幡山城の堀割として造られた「八幡堀」は、まさに近江八幡を象徴しています。城下町が栄える要因にもなった、町の一大動脈である水運は、四季折々の町の風景を私たちに楽しませてくれます。近江商人の町として栄えた風情のある町並みの各所から、歴史を辿ることができます。



O-1

旧八幡郵便局
近江八幡エリア総合案内所
Former Hachiman Post Office
OMIHACHIMAN Area Information Desk

2004年に復元された、近代建築の父と呼ばれるウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計による郵便局の局舎。



O-2



まちや倶楽部
MACHIYA CLUB

約300年の歴史を持つ西勝酒造の旧工場。2012年以降、まちづくりの活動拠点としても活用されている。



O-7

カネ吉別邸
KANEKICHI Private Residence

江戸期に繁栄を極めた元材木商の家と伝えられる、創業1896年の近江牛を扱う「カネ吉」が所有する町家。



O-8

藤 ya
FUJIYA

近江八幡でも古い部類に入る江戸中・後期の建物であると考えられている商家の家。



O-3

旧扇吉もろみ倉
Former OGKICHI Storehouse
for unrefined soy

近江八幡で代表的な醤油醸造元、平居吉蔵家のもろみ蔵。かつては年間50000升もの醤油を生産していた。



O-4

禧長
(旧喜多七右衛門邸)
KICHO
[Former Kitashichiemon Residence]

威厳のある大広間が残る江戸期から畳、麻網を中心に卸売業を営んでいた近江商人・喜多七右衛門の町家。



O-9

旧伴家住宅
Former Ban Residence

江戸時代初期の豪商「伴庄右衛門」が本家として、1827年から十数年をかけて建築した家。



O-10

幸村邸隠居
Koumura Family Retreat Residence

数奇屋風に建てられた母屋に隣接する建屋(建築年不明)は枯山水の庭を配し、「隠居」として使用された。



O-5

寺本邸
Teramoto Residence

母屋部分は推定築180年という町家。地場産業・八幡瓦を製造する最初の数軒であったと考えられている。



O-6

八幡山展望館
Mt. Hachiman Observation Deck

360°ガラス張りの展望館の空間からは、現在も基盤の目をとめる近江八幡市を一望できる。



O-EXT

ティースペース 茶楽
Tea Space SARAKU

築170年の八幡堀にたたずむ土蔵をリノベーションしたカフェ。2Fはギャラリーとしても活用される。



Say Say Say, Inc.

「Ask the Oracle」

2022 年 インタラクティブ・インスタレーション：
メタリックシンセルのフリンジカーテンによる彫刻、
デジタルウェブアプリ（QRコードによるアクセス）

"Ask the Oracle" 2022 interactive installation:
sculpture made out of metallic tinsel foil fringe curtains,
digital webapp (accessible via QR code)

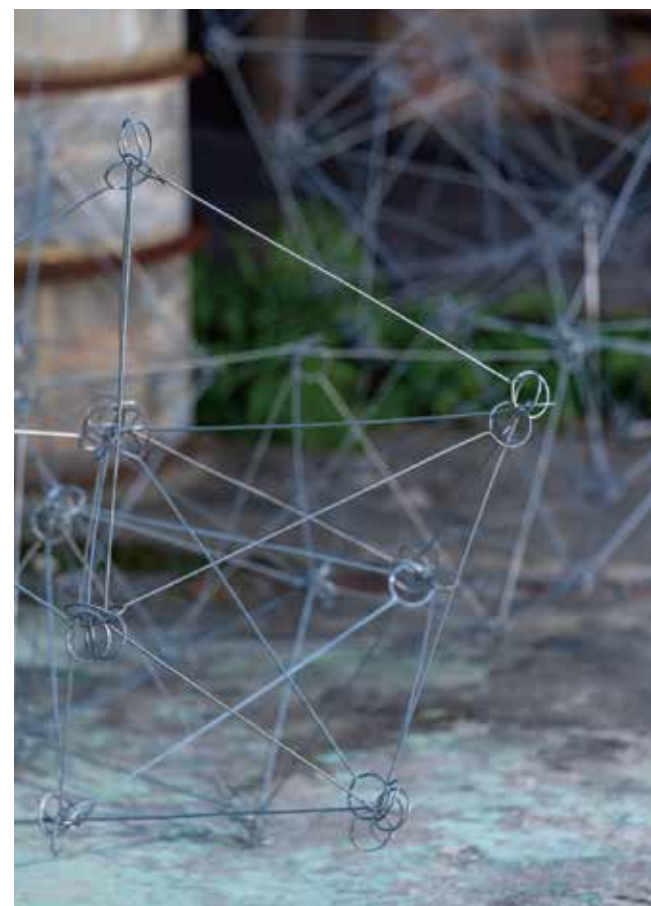


※こちらの QR コードは、デジタルウェブアプリの
QR コードではなく、作品動画になります。

*This QR code gives you access to a video of
the installation, and not the digital webapp.



BB SHOP



藤原 昌樹 Fujiwara Masaki

「テツノネ」2022 年 鉄／曲げ技法

"TETSUNONE" 2022 iron / bending technique

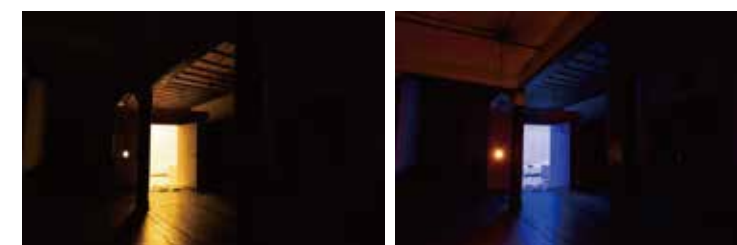


田中 誠人 Tanaka Masato

「Golden Atmosphere」

2022 年 家具、木材、照明器具、塗料、色鉛筆など

“Golden Atmosphere” 2022
furniture, wood, lighting fixtures,
paint, colored pencils, etc.





国谷 隆志 Kunitani Takashi

「A Whole New World (MILK, sky, メロン, Moon, ♡)」
 2022 年 ミクストメディア、ネオン管、変圧器、コード、ワイヤーバスケット
 "A Whole New World (MILK, sky, melon, Moon, ♡)"
 2022 mixed media, neon tubing, transformer, cord, wire basket



植松 琢磨
 Uematsu Takuma

「S / N-S」
 2022 年 繊維強化プラスチック
 "S / N-S" 2022
 fiber reinforced plastics



ガブリエラ・モラウエッツ (+タリナイナニカ)
 Gabriela Morawetz (+tarinainanika)

「When He Awoke He Was Drifting Down In a Golden Tunnel as In A River」
 2022 年 ビデオ・インスタレーション／2 チャンネルビデオループ (6"24)、
 彫刻 (ミクストメディア - 鉄、木、金箔、可変寸法)、作曲家: Kasper Toeplitz
 "When He Awoke He Was Drifting Down In a Golden Tunnel as In A River"
 2022 video installation / two channel video loop (6"24),
 sculpture (mixed media - iron, wood, golden leafs), sound : Kasper Toeplitz



International Art Festival BIWAKO BIENNALE 2022 ORIGIN

in Omihachiman & Hikone

会 期	2022年10月8日(土)～11月27日(日) 10:00-17:00 水曜日休場
会 場	滋賀県 近江八幡旧市街地 沖島 彦根市街地 彦根城 鳥居本
主 催	国際芸術祭BIWAKOビエンナーレ実行委員 独立行政法人日本芸術文化振興会 文化庁
制 作	国際芸術祭BIWAKOビエンナーレ実行委員会
助 成	公益財団法人花王芸術・科学財団 東方文化支援財団 公益財団法人河本文教福祉振興会 公益財団法人秀明文化財団 公益財団法人平和堂財団
協 賛	CGCO株式会社 株式会社日吉 オーストリア大使館 近江八幡まちや倶楽部 京都信用金庫 スウェーデン大使館 株式会社もりしま 森島商事株式会社 株式会社カネ吉ヤマモトフーズ 建築遺産アセットマネジメント Going Nuts! 株式会社千成亭風土 進々堂商光株式会社 夏原工業株式会社 有限会社フェイム ポーランド広報文化センター Australia Council for the Arts Region Halland 滋賀県酒造組合
後 援	在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本 滋賀県 滋賀県教育委員会 スロヴェニア大使館 しがぎん経済文化センター
協 力	あきんど道商店街 近江八幡左義長保存会 近江鉄道グループ 近江民族文化研究会 旧伴家住宅 株式会社平和堂 SHIN湯治 ルルド 成安造形大学 美術領域 現代アートコース 宇野ゼミ



[実行委員長] 小西 理(近江八幡市長)
[総合ディレクター] 中田 洋子
[事務局] エロディ・ダ・クルーズ 小野寺 雅彦 中田 杜樹
村井 龍三 山田 大高
[撮影] 平垣内 悠人(MILLIEN PHOTOGRAPHIC)
[PR映像撮影] 野田 明範(Nody_films)
[デザイン] 山中 崇寛(CHILLOUT CREATIVE SPACE)

[サブ写真撮影]
• 各ページ*印及び、P.73 O-11、O-13、O-15 : 中田 洋子
• P.57 **印 : 清水 里美
• P.104-105 H-10、H-11、H-13 以外 : 中田 洋子
• P.116-117 WORKSHOP 01、Event 01以外 : 中田 洋子及びスタッフ

[QRコードの動画撮影]
• P.12、P.20、P.28、P.63、P.110 : 平垣内 悠人
• P.14、P.19 : 中田 洋子 • P.31 : circle side
• P.50、P.83、P.88 : 野田 明範 • P.93 : 沙羅双樹

[Chairman of Executive Committee] Konishi Osamu (Mayor of Omihachiman City)
[General Director] Nakata Yoko
[Production Staff] Elodie Da Cruz, Onodera Masahiko, Nakata Soju,
Murai Ryuzo, Yamada Hirotaka
[Photography] Hirakakiuchi Yuto (MILLIEN PHOTOGRAPHIC)
[PR Video] Noda Akinori (Nody_films)
[Design] Yamanaka Takahiro (CHILLOUT CREATIVE SPACE)

[Other photography credits]
• All photos marked with (*), and p.73 O-11, O-13, O-15 : Nakata Yoko.
• p.57 (**) : Shimizu Satomi
• p.104-105, except for H-10, H-11, H-13 : Nakata Yoko
• p.116-117, except for WORKSHOP 01 and Event 01 : Nakata Yoko and staff
[QR Code video credits]
• p.12, p.20, p.28, p.63, p.110 : Hirakakiuchi Yuto
• p.14, p.19 : Nakata Yoko • p.31 : circle side
• p.50, p.83, p.88 : Noda Akinori • p.93 : Sarasaju

BIWAKOビエンナーレ2022 起源～ORIGIN 図録

2023年1月20日発行

発 行 国際芸術祭BIWAKOビエンナーレ実行委員会
〒523-0847 滋賀県近江八幡市永原町元12
印刷・製本 銀聲舎出版会
発 行 人 松尾 寛
発 行 所 銀聲舎出版会
〒641-0005 和歌山県和歌山市田尻529-1
E-mail ginseisha@fallinland.mods.jp

表 紙 Main visual "Conduction" by Kikoh Matsuura
I S B N 9784908474170

●公式WEBサイト(左)
<https://energyfield.org/biwakobiennale/>
●BIWAKO BIENNALE リンク集(右)
<https://linktr.ee/biwakobiennale>

